

ただいまカイゴ奮戦中 (第3回)

仕事を続けながら実母を介護したRさんの体験談は今回で最終回です。

長年にわたる介護生活には、地域の方がたの支え、親戚の気遣い、家族の協力がありました。



イラスト・井上ひいろ

叔父の葬儀の時のこと。母は、弔辞を聞きながら昔のことを思い出したのでしょうか。「うそばっかり。さんざん姉妹に迷惑かけて」と言い出したのです。声を潜めたりはしませんし、止めてもききません。思い出してしまったのだから仕方ないと周りも理解してくれましたが、場所が場所だけに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

意地悪で根性が悪いのが母の本性的なかと、悲しくなったこともあります。決してそうではないと受け止められるまでには時間を要しました。唐突に「ごめんね」「ありがとう」と照れくさそうに言ったときの顔、「姉さん！」と私を呼んだ後の「間違っちゃったかな」

という顔は、子どものようでした。

電車が止まって帰れない!

職場からの帰宅途中、事故で電車が止まり、帰れなくなったときはハラハラしました。家族とも連絡がつかず、ご近所二軒も不在。やっと、母のこともわが家のこともよく知っている友人と連絡がつき、自宅にかけつけてもらいました。暑い時期だったので、脱水状態になるのではと気が気ではありませんでした。座椅子から倒れぐったりしていたようですが、幸いことなきを得ました。目を潤ませながら「よかつたね」と言ってくれた友人、ありがたさが身にしみました。

地域の方にも見守られ

いま、東北の被災地で、地域つながりが大切と言われています。わが家も、ご近所の方のお世話になりました。母と同年代の方が、折りにつけ顔を見に来てくれ、母も嬉しそうでした。ショートステイの帰宅時刻に私の帰りが間に合わず、電話でお願いして家で待つてもらったことも。なじみの美容室では、母に合わせて珍妙な会話を、楽しみながカットしてくれました。私の夫や娘も協力してくれました。母は、娘の私には暴言を吐いても、夫

ほっと介護

107

に対してはわりと素直でした。認知症が進んでからは、できるだけ夜は二人体制がとれるよう、家族三人で都合を調整しました。母の姉妹たちも、それぞれ持病を抱えつつも母を見舞い、私たち家族を気遣ってくれました。

おしゃべりで気分スッキリ

長期間の介護をする時、気分転換は大切です。私は半年に一度、親友たちと、職場や介護、世の中のこと何でもさらけだして話すと、気分もスッキリ! また、短時間でも活発な友人たちと交流して元気をもらいました。「九条の会」の宣伝に顔を出せば、「ご苦労様。無理しないでね」とみんなが励ましてくれました。「三〇分で帰るか待っててね」と家を飛び出したのに、ついつい一時間ほどたつて帰宅すると、「自分の頭の上のハエも追えないくせに!」と母のキツイ一言。そういう時だけはしっかり会話がかみ合うから不思議でした。

いまは特別養護老人ホームに入所し、一日中うつらうつらしている母。「小言でも何でもいいから話したい」と思う今日この頃です。(おわり)